

Imaginary Companionの実態とその発達臨床的意義

ベンカート鈴風サイトウ

キーワード： Imaginary Companion, 心的外傷への対処, 発達臨床的意義

問題と目的

子供は時折架空の(空想上の)誰かを作り出し、それと遊んだり話したりする時期がある。このような子どもの遊びにしばしば登場する仲間・遊び友達を一般的に Imaginary Companion(以下 I.C.)という。

Taylor(1999)は I.C.を特別なものとしながらも、幼い頃の多くの空想生産物の1つに過ぎないとし、その多様性は子供の豊かな空想生活の証拠であると述べている。また、I.C.を作るとは情緒的あるいは対人関係の問題の徴候だと解釈すべきではなく、「メンタルヘルスにおけるポジティブなサインである」という解釈を頭に入れておく事が大切だとしている。しかし、日本ではこの存在はほとんど知られておらず、研究の数も非常に少ない。川戸・遠藤(2001)の調査においては約3割の母親がネガティブな反応を示したという結果が出ている。

I.C.の明確な定義についてはいまだ曖昧である。初期の研究とされる Svendsen(1934)の研究における定義をもとに、友弘(2005)は考察の末に以下の様に定義した。

- 1: I.C.は目に見えないキャラクターである。
- 2: I.C.はある一定の期間少なくとも数ヶ月の間存在する。
- 3: I.C.は「彼」であり、「私」とは異なる他者として認識される。
- 4: I.C.は彼自身のパーソナリティを持っている。
- 5: I.C.は所有者の行動を統制することはない。
- 6: I.C.は目に見える客観的な基盤となるものは存在しない。
- 7: I.C.の所持には通常のもの忘れでは説明できないような健忘を伴わない。
- 8: I.C.の所持者は自己の同一性について混乱していない。
- 9: I.C.は臨床的に著しい苦痛、または社会的、職業的、または他の重要な領域における機能の障害を引き起こすものではない。
- 10: I.C.は物質(例: 薬物乱用、投薬)または

一般身体疾患(例: 側頭様てんかん)の直接的な生理学的作用によるものではない。

11: I.C.の所有者は I.C.が現実にはいないという事を意識している。

この定義は「客観的な基盤となるものは存在しない」としているが、川戸(2002)は「全く目に見えず何の見立ての対象も存在しない場合(Invisible Companion: 以下 I.V.)」だけでなく「ぬいぐるみや人形等の具体的な見立ての対象がある場合(Personified Object: 以下 P.O.)」も含めて考えている。麻生(1989)は I.C.の定義について『想像の遊び友達』現象は決してはっきり境界づけられる輪郭のはっきりした現象ではない。」と述べており、現象の曖昧さ故に定義の食い違いや定義が明確にされていない研究があると指摘している。

今回、定義を明確にするにあたって I.C.の性質を見ながら、他の研究や類似の現象と比較し考察した。子どもが I.C.を創造する理由について Taylor(1999)が以下の項目を挙げている。

- 1: 楽しさと交友の獲得
- 2: 孤独への対処
- 3: 有能感もしくは自尊感情の獲得
- 4: 現実では対応できない欲求不満の代替解消
- 5: 非難・責任の回避
- 6: 恐怖への対処
- 7: 他者とのコミュニケーションの手段
- 8: 心的外傷に対するレスポンス
- 9: 興味深いあるいは重要な意味を持つ人物や出来事の処理

このような要因によって I.C.が発現すると仮定すると、以下の条件を満たしていると考えられる。

- 1: 一貫したパーソナリティを持つ
- 2: 自分ではない他者として創造・想像される
- 3: 一定期間存在する
- 4: 所有者の行動を統制することはない

I.C.と類似している現象として、解離性同一性障害、移行対象、幻覚等が挙げられる。I.C.は

発現した時から創造主に存在を認識されており、一貫したパーソナリティを持つ、現実と混同されることのない存在なので先の3つとは異なる現象であると言える。

現実と空想の識別について Taylor(1999)は、3 から 4 歳の子供は「本当」と「ふり」という言葉の理解と区別ができはじめ、5 から 6 歳にもなれば子供は「ごっこ遊び」をマスターし、想像上の役割への出入りが自在にできると指摘している。子供は他人が「まね」をしてもそれがごっこ遊びだとわかるし、想像上の友達は空想の産物だと確信しているし、空想のイベントと普通のイベントの区別がきっちりしている。時として本当に何が現実で何が空想か混乱する事もあるが、これは子供自身の想像力によってコントロールできない空想的な要素が含まれているからではないかと Taylor(1999)は推測している。故に子供達は、自分が空想をコントロールする側になっていけば、多くの場合において何が起きているのかしっかり理解できていると言えるだろう。子供が時として空想の産物に対し強い情緒的な反応を示す事が現実と空想の区別に関する誤解に繋がっていると考えられるが、空想に対して情緒的な反応を示すのは子供だけではない。大人でも映画等を見て悲しみや恐怖を覚える事があるにも関わらず、現実と空想の区別がついていないのではないかと誰かが疑うような事はない。

以上のことから本研究では I.C.を以下の様に定義する。

- 1: 一貫したパーソナリティを持つ
- 2: 自分ではない他者として創造・想像される
- 3: 一定期間存在する
- 4: 所有者の行動を統制する様なことはない
- 5: 所有者が自らの空想の産物として認識し、現実と混同される様なことはない

本研究では、以上の定義に基づき I.C.の実態を調査する。それを通して、発達臨床的意義について考察する。

I.C.の実態調査

方法

対象者: Y 大学に在籍する学生 176 名が対象

であった。

質問内容: 1.子供時代におけるごっこ遊びの経験と楽しかった理由, 2.子供時代における移行対象の有無と大事にしていた理由, 3.P.O.の有無とその時期, 状況, 役割, 4.I.V.の有無とその時期, 状況, 役割について段階的に尋ねた。アンケート作成の際には、質問内容が I.C.の実態を調べるのに適切かどうかについて、心理学を専攻する学生や大学院生、そして臨床心理学教員を交えて 90 分を 2 回に渡って検討した。

手続き: 回答してもらう前に「くまのプーさん」を用いて I.C.の存在を口頭で説明し、アンケートを実施した。

実施時期: 2014 年 12 月

結果と考察

176 名のうち移行対象を持っていた者は 59 名(33.5%)であったのに対し、I.C.を持っていた者は 28 名(15.9%)、移行対象と I.C.双方を持っていた者は 11 名(6.8%)であった。

I.C.のほとんどは P.O.であったが、これは具体的な見立ての対象がある方が容易に創造・想像しやすいからではないかと推察できる。回答の際に P.O.と移行対象が混同されたケースがあり、これは回答者が I.C.と移行対象を混同してしまうような聞き方をしてしまったからだと考える事ができるが、移行対象に後から人格づけがなされて I.C.に変化した可能性も考えられる。先行研究で移行対象と I.C.の関連について触れる事は多く、富田(2002)は「移行対象を持つ子どもは、それを置き忘れたり失ったりする経験をくり返す事によって、あるいは何かを心の中で持続的にイメージする事が可能となるにしたがって、想像や空想が自らの慰めになり得る事を発見する。その結果、彼らはもはや直接目で見たり触れたりすることのできる移行対象を必要としなくなる。代わりに、何人かの子どもには目に見えない空想の友達を作り出し、それが母親や移行対象が与えていた心地良さや統制感を満たす様になる」と考察している。また、Singer&Singer(1990)は乳児期の移行対象の延長として発達的に I.C.が生じるとしている。

移行対象を大事にしていた理由を聞くと、「触り心地が良かった」「おちつく」「じっくり

くる」等,肌触りと安心感が上げられる事が多かった。移行対象を持つ者と I.C.を持つ者の割合の差は,不安や寂しさを解消する役割を移行対象が果たす事で I.C.が発現しなかったからではないかと考えられる。

I.C.の存在は友人もしくは年下の存在である事が多かった。年上あるいは目上の存在を創造するケースは少なく,祖父母のような家族的な存在ばかりであった。このことから,I.C.は仲間,相談相手,世話をやく対象など,身近で気軽な存在として創造されやすいのではないかと推察できる。自分にできないことをやってくれる大人や超人のような存在があまり見られなかったのは,ごっこ遊び等のなりきり遊びで「いろんなことができる自分」を空想して不満や欲求を解消していたからではないかと考えられる。

I.C.は一貫したパーソナリティを持っているので創造主の「人形」になることはないが,創造主のニーズに合わせて発現・消失するので「都合の良い理想的な存在」になる。今回の調査で身近で気軽な I.C.が多く見られたのは,気さくで遠慮しなくても良い慣れ親しめる存在が「都合の良い理想的な存在」として求められる事が多いからだと推察できる。

総合考察

Taylor(1999)は I.C.の創造要因の1つとして「心的外傷に対するレスポンス」を挙げているが,これも「都合の良い理想的な存在」として I.C.が現れているからだと考えられる。心的外傷への対処方法として子供が I.C.を作る事はあっても,これそのものは悪いサインではない。

Singer&Singer(1990)は I.C.を持つ子供全体について,保育園での自発的な遊びでより想像性と肯定的情緒を示し,大人と協調的に行動すると報告している。特に男児は, I.C.を持ち,テレビのアクション-冒険番組を見る事が相対的に少ないと,攻撃的行動が少なかった。疲労や不活発さ等のネガティブな感情状態といくらか負の関係が認められ,遊び場面で恐れや不安が少ない事も示された。また,女兒の場合,遊んでいる間に怒りや恐怖を示す傾向が少なく,とりわけ悲しみに関してはそうであったと報告している。虐待を受ける等して心的外傷

をうけながらも I.C.を創造した子供は,まだ自分なりにコーピングしようとしているのではないかと考えられる。

I.C.はあらゆる形,大きさ,年齢,性別,種族でありうる特別な存在であるが,幼い頃の多くの空想生産物の1つに過ぎず,その多様性は子供の豊かな空想生活の証拠である。I.C.そのものは懸念の材料にはならないが,心理的苦痛への対応として先述の様に生みだされる事もある。よって,「何がきっかけで生まれたのか」「どのような存在なのか」等の情報を,その空想が壊れないやり方で集めるのが重要であると言える。I.C.は発現してから消失するまでその性質を崩す事はなく,子供に深く愛される存在である。大人でも映画や小説等の登場人物に大きな影響を受けて良い方向へと導かれる事は珍しくないが,I.C.はその現象を自ら起こしていると言えるのではないだろうか。また,足りないものを空想で補い充足感を得ている点から,防衛規制における「補償」の働きも持っていると考えられる。Taylor(1999)は空想をただの娯楽や現実逃避の形態ではないとし,自分達の想像力で我々は過去を追体験・処理する事によって,現実の出来事を受け入れ,未来を予期して対策する事ができると結論づけている。

以上の事から,I.C.は現実だけではどうしようもない物事に出会ってしまった時に,創造主との交流を通して処理を補助する補償的な役割を果たしていると筆者は考察した。

引用文献(一部)

Taylor,M. (1999). *Imaginary Companions and the Children Who Create Them*. New York : Oxford University Press.

川戸由季 (2002). *Imaginary Companionの実際と発達の規定因を探る*. 九州大学大学院教育学研究科修士論文発表会原稿 (未公刊)

Singer, D.G. & Singer, J.L. (1990). *The house of make-believe: Children's play and developing imagination*. Cambridge, MA: Harvard University Press (高橋たまき・武藤隆・戸田須恵子・新谷和代訳(1997). *遊びがひらく想像力: 創造的人間への道筋* 新曜社 131-169).